

日本古典全書

宇津保物語 四

13

監修

新村 出
山岸 徳平

高木市之助
小島 吉雄

久松 潜一

宇津保物語

四

宮田和一郎校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「宇津保物語」四 宮田和一郎校註

昭和三十年一月十五月初版發行

昭和四十年十一月三十日第三版發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

北九州市小倉區砂津・名古屋市

中區廣小路）

宮田和一郎（みやたわいちろう）

明治二十三年新潟縣生。大正九年

京都大學文學部卒業。池坊學園短

期大學教授。主著―頭註對譯源氏

物語、更級日記精講、校註簞日記、

成尋阿闍梨母集新釋等。

定價 四二〇圓

目次

凡 例……………三

各卷にあらはれる人人……………六

藏 開(下)……………六

國 讓(上)……………八

國 讓(中)……………一〇

本 文……………一三

藏 開(下)……………一三

一 涼方の産養の續き、涼仲忠と語る……………二三

二 涼仲忠なほ物語る、正頼より文あり、涼返事す……………二六

三 祝宴、種松より贈物あり……………二九

四 大宮と仲忠と歌の贈答、仲忠琵琶彈……………三〇

五 仲忠涼、正頼の君だちと語る……………三三

六 仲忠、涼に車を借らんことを乞ふ……………三五

七 内侍のすけ、今宮・大宮と語る……………三七

八 涼よりの贈物、涼と仲忠との消息……………三八

九 内侍のすけ、忠俊夫妻不和のことを仲忠夫妻に語る……………三九

一〇 兼雅・仲忠、女三の宮らを迎へに行……………三三

き、兼雅中君と語る……………三三

一一 兼雅、女三の宮と語る……………三四

一二 仲忠、仲頼妹と語る……………三五

一三 兼雅・仲忠、女三の宮らを三條に迎……………三八

ふ……………三八

目 次

一

目次

二

一四	正頼あて宮の迎へに参内す、春宮あて宮の退出を許さず……………	完
一五	早朝正頼よりあて宮に文あり、春宮見て怒らる……………	三三
一六	司召、忠澄・親澄ら昇進、春宮あて宮の退下を許さず……………	四四
一七	仲忠、仲頼の妹に米炭等を贈る……………	四五
一八	兼雅、式部卿宮の中君に衣食の料を贈る……………	四八
一九	兼雅、仲忠と、家の交換その他につきて語る……………	五〇
二〇	大宮、夫仲俊と中違せる七の君をいましむ……………	五三
二一	新年の拜賀、仲忠梨壺を訪ふ、正頼以下昇進……………	五四
二二	大宮百日の祝、仲忠、春宮のみこたち玩具を贈る……………	五七
二三	仲忠、約束の家を兼雅に引きわたす……………	六三
二四	兼雅、中君を三條の東の家に迎ふ……………	六三
二五	兼雅、中の君を俊蔭女に託す……………	六六
二六	兼雅、女三の宮を訪ふ……………	六八
二七	一條に残れる兼雅の妾ら分散す……………	六九
二八	兼雅父子、一條の空居を訪ふ……………	七一
二九	梨壺退出、兼雅父子迎へにまゐる……………	七四
三〇	春宮より御文、梨壺返事す……………	七七

國讓（上）

七九

一	正頼邸に同居の人人、別居す……………	七九
二	季明病氣危篤、實忠を呼びよす……………	八二
三	季明、正頼を招き後事を託す……………	八三
四	季明、實忠と物語る……………	八六
五	季明、昭陽殿に遺言、薨去……………	八八
六	あて宮、退出前に春宮と物語る……………	九〇
七	あて宮退出、兩親と語る……………	九三
八	涼よりあて宮に贈物、春宮より御文あり、あて宮返事す……………	九六
九	涼・彈正の宮の訪問……………	九八

一〇	大宮、親澄の身の上を仁壽殿に嘆く……	一〇〇	二一	あて宮、春宮と文の贈答、仲忠より返事あり……	一二九
一一	翌日春宮より、又女一の宮より御文あり、あて宮返事す……	一〇三	二二	翌日侍女らあて宮の前にて仲忠の噂す……	一二三
一二	仲忠あて宮を訪ふ、御子に讀書を授くべく約束す……	一〇五	二三	女一の宮、女二の宮女三の宮とあて宮を訪ふ、仲忠母子の琴の噂、髪の長さをくらぶ……	一二三
一三	あて宮ら、涼の贈物及び殿内を見る、涼堀川の邸に移る……	一〇八	二四	孫王の君姉妹、上野宮の噂す……	一二七
一四	太政大臣季明の薨送……	一一〇	二五	あて宮女一の宮ら奏樂、仲忠、女一の宮の迎へに來て立聞く、宮歸らず……	一二八
一五	あて宮、文を實忠に贈る、實忠返事す……	一一〇	二六	仲忠、再び迎へに參る、女一の宮なほ歸らず、仲忠あて宮方に泊る……	一二八
一六	實正、實忠に、昔あて宮を見し時のことを問ふ、春宮より昭陽殿へ御文、昭陽殿返事す……	一一四	二七	梨壺御子うみたりと聞きて仲忠夫妻歸る、あて宮藏人に梨壺の様子を聞く……	一二七
一七	あて宮の使者復命、春宮よりあて宮に御文、御返事……	一一八	二八	産養、兼雅皇子を愛す、梨壺の母女三の宮時めく……	一二九
一八	あて宮、寢殿へ歸らんとす、實忠仲澄の噂、忠澄ら交替にてあて宮の宿直せんとす、あて宮歸る……	一二〇	二九	仁壽殿、女一の宮に女二の宮を託して宮中に歸る……	一三〇
一九	あて宮の假御殿……	一二五	三〇	あて宮の安産及びその皇子立太子の……	一三一
二〇	仲忠、若宮の手本をあて宮に奉る……	一二六			

目次

四

御祈り……………	一五	三四	實忠、あて宮方へ禮まはりに来る、 あて宮、實忠に山を出でて舊妻と同 棲せんことを勧む……………	一五九
三一 忠雅兼雅正頼以下昇進……………	一五			
三二 昇進の人人御禮まはり……………	一五			
三三 あて宮方にて、祐澄、實忠らの噂す……………	一六			

國讓 (中)

一五七

一 正頼任大臣の大饗、兼雅任大臣の大饗……………	一六	一〇	實正、實忠の妻子を三條に迎ふ……………	一九〇
二 實正、實忠に京に歸りて舊妻と同棲せんことを勧む……………	一六	一一	春宮、御文にて度度あて宮を召す、 皇太子の地位につき正頼家の危惧、 女四の宮懷妊の噂……………	一九二
三 實正、志賀の山本に實忠の舊妻を訪ひ、京に出でんことを勧む……………	一七	一二	女一の宮懷妊、彈正宮の見舞、兼雅、 仲忠を招きて立太子に關する后宮の 密旨を告ぐ……………	一九八
四 春宮よりあて宮へ贈物……………	一七	一三	仲忠、忠こそ女一の宮の加持をた のむ……………	二〇一
五 あて宮へ贈主不明の贈物……………	一七	一四	仲忠、帶を忠こそに示す……………	二〇四
六 あて宮、第四の御子をうむ、產養……………	一七	一五	兼雅、女一の宮の病を見舞ふ、蹴鞠、 仲忠女二の宮を恒間見る……………	二〇六
七 仲忠の產養の贈物、内侍のすけ、あて宮に仲忠夫妻の噂す……………	一八	一六	兼雅、小倉遊覽を正頼と約す……………	二〇九
八 實忠、文をあて宮に送る、返事あり……………	一八	一七	親澄ら女二の宮に熱心なり……………	二二
九 宮の君あて宮を罵る、實正、再び實忠に舊妻と同棲せんことを勧む……………	一八			

一八 仲忠、女一の宮の懷妊に氣づく……………	三二	三〇 彈正宮、あて宮を訪ふ……………	三九
一九 女一の宮女二の宮仲忠ら桂の別荘へ ゆく……………	三三	三一 實正、實忠を三條邸につれ歸る、實 忠、妻子を見知らず、袖君の悲嘆……………	三〇
二〇 兼雅、犬宮を鍾愛す……………	三三	三二 實正・實賴、實忠を三條邸に引きと めんとす……………	三三
二一 鮎をとりてところどころに贈る、消 息す……………	三五	三三 實忠、舊妻と昔を語る……………	三四
二二 人人歌よみ酒飲む……………	三六	三四 仲忠、實忠を訪ふ……………	三八
二三 人人文の贈答……………	三七	三五 正賴、忠澄祐澄らとともに實忠を訪 ふ……………	三九
二四 女一の宮氷を召す……………	三〇	三六 實忠あて宮文の贈答……………	四一
二五 人々管絃し歌よむ……………	三三	三七 實忠夫妻、舊のごとくむつまじ……………	四三
二六 仲忠、鮎をあて宮腹の若宮に贈る、 若宮より文あり……………	三三	三八 實正、實忠が妻にあてたる文を見る……………	四四
二七 親澄、女二の宮の乳母に消息す……………	三五	三九 正賴、物を實忠に贈り、實忠の妻と 文を贈答す、實忠、小野へかへる……………	四六
二八 梨壺あて宮らところどころに祓す……………	三七	四〇 春宮、あて宮へ御消息、あて宮より 御返事なきを怪しまる……………	四八
二九 梨壺腹の御子立太子の噂、正賴ら歡 き神佛に祈る……………	三八		

宇津保物語

四

宮田和一郎

凡 例

一、本書は宇津保物語の第四分冊である。

一、本書は慶長十五年三月十四日箇庵主道人の奥書ある寫本と、文化の補刻板本・國文大觀本・有朋堂文庫本・日本古典全集本とを参照しつつ、それらのよきに従つて本文を定めたものである。

一、註は本文の語句の右肩に附けた漢數字と照合するやうにした。

一、頭註は、註釋と校異とを混合して施してある。校異は主要なるものとどめ、いづれにしても誤りなること歴然たるものなどは、これを省略した。

一、頭註は出来るだけ簡略に従つたので、意をつくさない點があるかもしれない。しかし、宇津保物語にはまだ纏まつた註釋書がないのであるから、本書は特にその點に鑑み、將來この物語の讀解研究にすこしでも役だつやう力めた。

一、本文を適當に區分して段落を設け、句讀點を施し、漢字をあて、假名遣・送假名を統一して繕讀の便をはかつた。

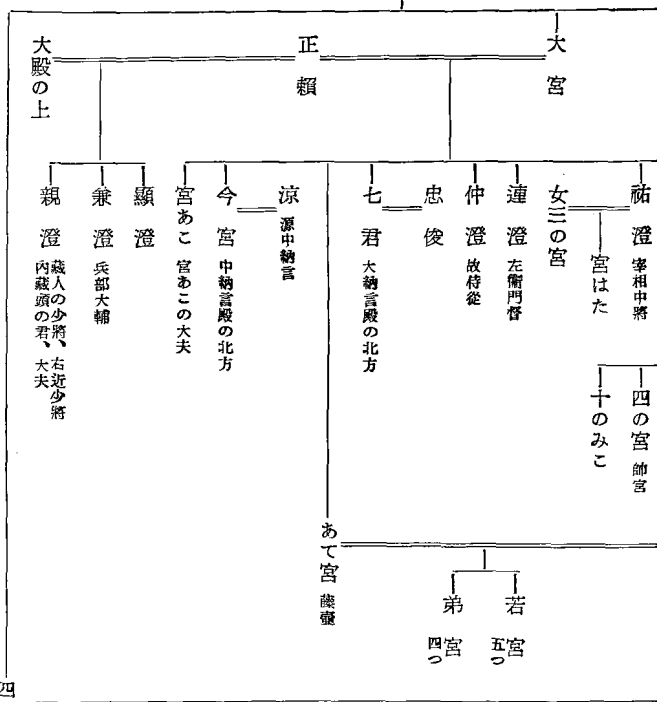
一、畫詞の部分は、原本では本文中に續けて書いてあつて、一見區別が明瞭でないが、讀んで見ると見當

がつくのであるから、【書詞】として、行を改め、二字下げて本文と區別しておいた。

一、卷の順序は古來異説があつて一定しない。で、試みに年立を作つて検討して見た結果本書の如くに定めたのである。

一、本書には、藏開（下）・國讓（上）・國讓（中）の三卷を収めた。

嵯峨院



四の宮

承香殿
院の御方
春宮の御方

孫王の君

中將の君

内侍のすけ

右近

木工の君

あこき

更衣 梅壺

良岑行正 良中將

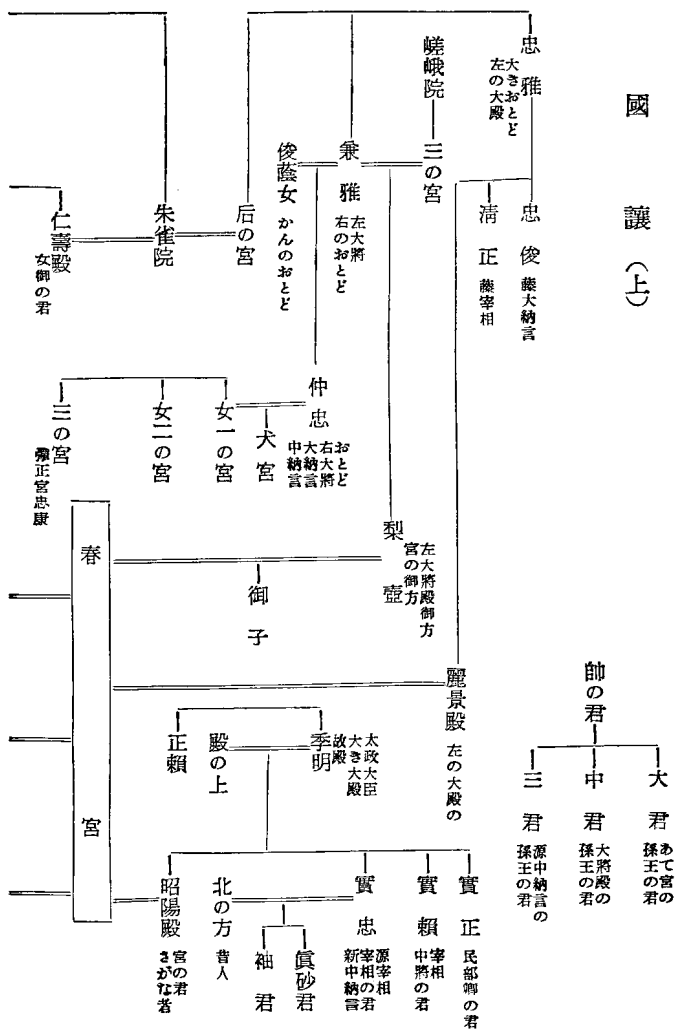
近江守

后宮の御匣殿

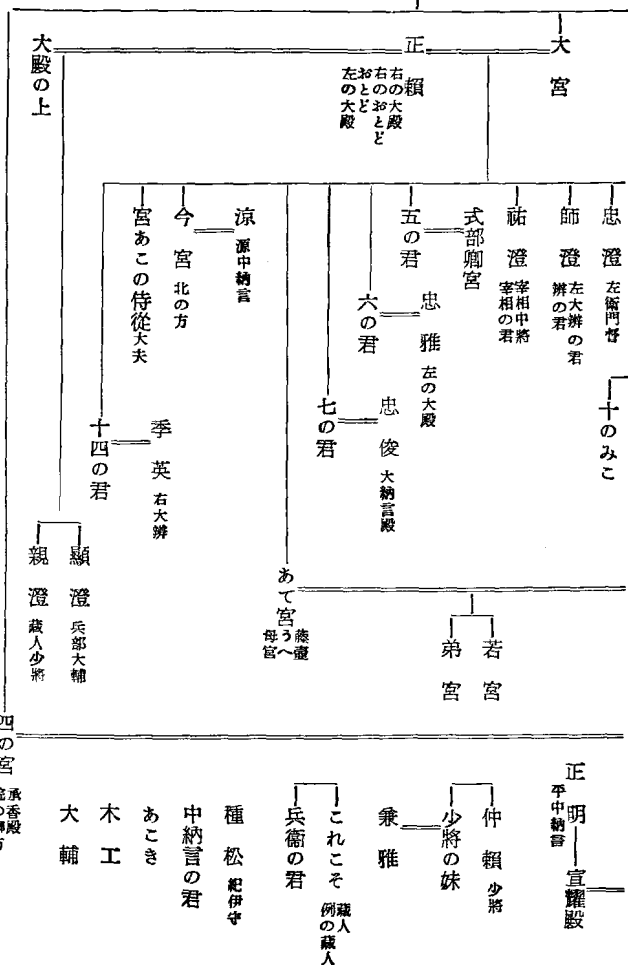
伊豫介

各巻にあらはれる人人

國讓上



嵯峨院



各巻にあらはれる人人